

歴史散歩



おうか 市指定史跡 栗加の一本松跡

安濃川沿いを通る県道42号から安濃町荒木にある明合橋を渡ってすぐ左に曲がり、南方向にしばらく進むと、木々が茂る一角に「一本松の跡」と文字の彫られた石碑が見えてきます。これが、市指定史跡「栗加の一本松跡」です。

ここには、昭和56年まで江戸時代初期の寛文3(1663)年に植えられた松の大樹があり、「栗加の一本松」と呼ばれ親しまれていました。ところが、虫害のため枯死してしまい伐採せざるを得なくなってしまったことから、この歴史的な松があったことを後世に伝えるため、昭和57年8月に栗加区の人々によって、石碑が建立されました。

この地に一本の松が植えられたのには理由があります。江戸時代初期、安濃川から田んぼに水を取り入れる際に、右岸となる栗加村と左岸に当たる安濃村との間に起こった水争いが発端となっています。

当時は米作りが経済の基本であったため、人々にとって水不足は死活問題でした。両村の取水は半分ずつという慣例はありましたが、安濃川の川筋が変化したり、干ばつが発生したりするなどで水不足になると、少しでも多くの水を得ようと争いが起こったといわれています。

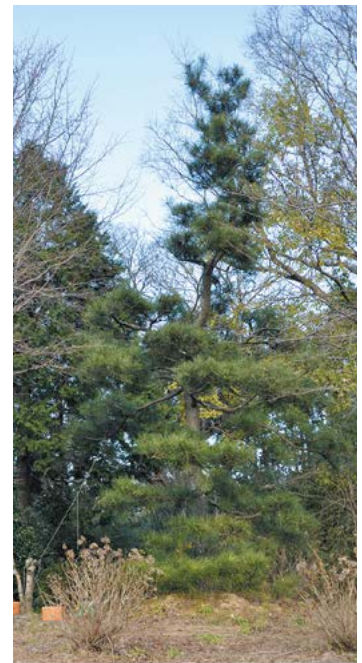


栗加の一本松跡

そのような中、寛文3年に起こった水争いの際、今後このような争いを防ぐため、安濃川からの取水場所の境界の目印として、津藩の大庄屋が両村から確認できる場所に「永代証拋松」とする一本の松を植えて決着させました。

時代が変わった今日でも、平成12年2月に石碑から東に6mほど離れたところに2代目の松が植えられるなど、歴史を刻む場所として地元の人々に大切にされています。

安濃ダムにより安定した農業用水が供給されるようになった現在では、当時と変わらず稲作が盛んに行われており、豊かな田園風景が広がっています。



2代目の松

